戦争と平和を考える集会を開催

若者を再び戦場に送るな

「戦争と平和を考える集会」を開催し、平和への希求を再確認！

NPO法人戦没者を慰霊し平和を守る会は、これまで塩川副理事長を中心に戦没者を慰霊するために遺骨収集活動を主に行ってきました。今年に入り、理不尽なアメリカのイラク攻撃以降、日本の右傾化は目を覆うものがあります。イラク攻撃への支持、有事法制関連三法の可決に続き、今も戦時下にあるイラクに自衛隊を派遣する法律まで制定しました。

このような中、「平和を守るために私たちに出来ることは何か」を考え、私たちも含め、より多くの方々に「現状を認識してもらうことが重要である」という思いで、講演形式で集会を開催することとなりました。

私が、久留米大学教職員組合の執行委員会をしている関係で、組合執行部にこの集会の主旨を説明したところ、「組合員も戦争に派遣され、生命の危機を脅かされない。是非、協力したい。」との意向があり、二〇〇三年八月十日(日)、久留米大学筑水会館二階イベントホールにて「戦争と平和を考える集会（若者を再び戦場に送らないために）」を当会と久留米大学教職員組合との共催で開催しました。

急な思い立ちで十分な広報活動が出来ない中、学生や一般市民の方々を含め二〇〇名以上の参加があり、一階に展示した戦没者の遺留品や写真にも、多くの方々に足を止めていただきました。

講演は、当会の理事で、久留米大学教職員組合の顧問弁護士でもある川副正敏弁護士により「憲法と有事法制を考える～今どうして戦時体制法なのか?～」という演題で、行われました。有事法制がどのような法律なのかを具体的に説明され、「首相に権限を集中したり、自衛隊への協力拒否者に対する処罰を規定するなど、戦時体制づくりへの足場を固め、戦争国家への道を進んでいる」と問題点を指摘されました。また、法律の歴史的な観点から、太平洋戦争前の状況と現在の状況の酷似点を述べられ、「平和な時期に制定された国家総動員法は当初中身が無かったが、その後多くの関連法ができて、転がるように戦争へと進んでいった。今回の有事法制も中身は無いが、これまでの経過を考えると今後の流れは明白である」と懸念を示されました。

講演後、参加者から「平和を守るためにどのような方策が考えられるか?」との質疑があり、川副先生より「情報はいろんな場所で手に入れられる。まず知ることから始めて、あらゆる所で戦争反対の意思表示をしよう」という強い訴えがありました。

集会の最後に、久留米大学教職員組合の宝来書記次長により、「イラクへの自衛隊派遣に反対する」緊急アピールが行われ、満場一致で採択されました。

川副先生のご協力により、この集会の当初の目的である「現状認識」は、ある程度達成できたのではないかと考えます。参加者の方々にお願いします。この集会で得た知識をいろいろな場所で話して行きましょう。私たちは、二度と戦争の加害者にも被害者にもなりたくありません。戦没者にも遺族にもなりたくありません。「戦争への道」を止めることは難しいことかもしれませんが、平和な社会を守るためには、今私達に出来ることを始めることが求められていると考えます。

事務局長　高木　一希

講演中の川副弁護士

同時開催し、多くの若者が参加した遺留品展

シリーズ(1)　若者へ戦争を語り継ぐ

久留米のドイツ村

三島　重人

(1)村落社会

西欧で歴史ある国家となったドイツは、やがて視点を転じて東洋に進出することとなった。中国の北部青島に要塞を築いて、数千人の兵員を駐留させたのも、こうした目的からであったろう。

ところが一世紀ほど以前から、日独間には国際的トラブルが発生し、久留米第一八師団が攻撃して鎮圧し、ドイツ兵士を捕虜として日本へ凱旋することとなった。

その詳細については、本年三月久留米市の教育委員会から刊行された「ドイツ軍兵士と久留米」と題する文化財調査報告書に述べられている。

同書には写真や資料イラスト等が多数添加されており、一見してドイツ兵士達の日常振りが分るように配慮されている。当時の事実を理解し得る労作である。

彼等は一九一四年(大正三年)から五年間、異郷で不自由な毎日を送った。人情風習の違いもあって初めの内はトラブルの連続であったようだが、住めば都の言葉どおり、やがて地域にも馴れ、それぞれの立場で社会に親しんだとのこと。報告書には、彼等によって久留米近代史の一頁が作られたとも述べられている。私はその収容所の模様を知って「久留米に出来たドイツ村」と呼ぶことにしている。

ドイツ兵士達(以下一行と呼ぶ)は一九一九年解放されて此地を後にしたが、一体どんな追憶と感慨を胸に秘めて故国に帰ったであろうか。

後年、私は不幸にしてソ連の捕虜となって、シベリヤ生活を送ったが、一行の五年に及ぶ動静を回想するにつれ、因果は巡る人間縁の不思議さを思はざるを得ない。

(2)町の顔

地域社会の中心となって歴史を作り上げた町には、それぞれ特有の顔があるものだ。

久留米の町には昔から二つの顔があると言われた。軍都の顔と商都の顔である。久留米兵団は九州一円から精気ある若者を集めて日夜軍事訓練を重ねた。その勇敢さは天下の知るところ、全国に武勲と勇名を馳せたものである。また久留米商人が勤勉で利殖の才に長けて商圏を広めた働き振りには大阪商人も舌を巻くとの評があった。

本来軍と商とは、戦と和と言う異質のものであるが、久留米では時の利もあって、両々相俟って町勢発展の原動力をなしたところに特色があった。

例えば明治時代の日清日露の二大戦後の経過をみると、双方の国力には大差があって、初めから勝負ありと考えられていたにも拘らず、日本は両戦ともに大勝を博する結果を得た。勝ち誇った国民は口を揃えて叫んだ。日本は神国だ。神の加護あり神風ありと。こうして日本は戦えば勝つ。勝てば「戦争景気」が転がり込むものだと錯覚した。敗戦の憂き目をみてはじめて平和の尊さを知った日本、そして久留米は「軍都」という大事な特徴を失う片腕の町となった。しかもその後バブルの夢も破れて長期不況の嵐に晒される次第となったのである。

戦に敗れたドイツは、その後科学や理学の世界に徹して活路を見出さんとしているようだ。資源に乏しい日本の再生は何処に求むべきか。世界に活躍して、いよいよ再起の正念場を開拓すべき時代となった。

(3)旧知再会

一行と別れてから、早くも二〇余年の歳月が流れた。多事にして多難。しかも多彩な時の経過であった。

これからは、ドイツ村の話題から離れて戦中戦後の私の足跡を少々たずねてみたいと思う。

それから私は各地を転勤しながらサラリーマン道を歩いていたが、見廻すと日に日に戦時色が濃厚になって、一喜一憂のニュースが町に流れていた。

そして或る日、図らずも出張先で一通の書状を受け取った。召集通知の所謂赤紙である。有無を言う暇はない。老兵の身を軍服に包み、送り出された先は南支の広東(広州)の郊外、広漠たる飛行場であった。

飛行場の整備に当たること半年ほどで更に下命があり、本部隊は北地に向け発進せよとのこと。その後は行先不明のまま北へ北へと歩きはじめた。ようやく徐州(火野葦平著「麦と兵隊」の拠点)に辿り着いたその時、駅前で聞いたのが終戦のラジオ放送であった。放心状態で放送を聞いた酷暑の朝であった。そこで部隊は直ちに朝鮮を経て帰国の予定から、国境の町山開関を越えたところ、待ち受けられたのは予想したこともないソ連軍であった。

捕虜の身になったのは、正にこの時である。武装解除されて丸腰となり、汽車に乗せられて揺られること十日余満州の北端黒河で降ろされた。

それから結氷した黒瀧江を渡って対岸ブラゴエチエンスクに入った。我々帰心矢の如き一同は、ソ連を信じてウラジオストックから日本へ返してくれるものと信じていた。しかし、その後の動きはすべて期待の反対へ反対へと運ばれて行った。西へ西へと行き先も分らぬ広野の旅。

車中の思い出は山ほどあり、今も記憶にあるが、話の本筋から外れるので話題にしない。只一つだけ笑い話としておきたいのは、大湖水にまつわる希望と失望の一幕だ。バイカル湖畔にさしかかった。余りにも広大な水面なので、湖畔で一休みすることになった。てっきり日本海海岸にきたと確信した。顔を洗い手を入れて舐めてみると、何度しても塩味がない。淡水湖ではないか。一同暗然として口を開く者はなかった。

見るものすべてが雪の原と白樺林ばかりの原野、白色の世界である。ままよすべてが運命だと思う中に、夜も深くなってようやくにして目的地に到着、やっと降車させられた。

東も西も分らないが、夜目にも見えるのは、駅の近くにボタ山があること。山はとろとろと炭火が燃えていることであった。どうも炭鉱地域らしいと直感した。

翌日から当てがわれた仕事は採炭であった。生まれて初めて当たる採炭、地下にもぐると初めてみる不気味な暗黒社会である。そして我々の収容所はと言えば、元刑務所であった跡らしく高い塀に囲まれて、角々には高い監視所があり、一隅には営倉が設けられている。

それにしても驚いたのは、この施設(ラーゲルと言う)には、すでに先客が到来しているという事実であった。

よく見ると、先客達は同じ棟の中に居を構え、廊下を挟んで前後に暮らして、しかも先客達は緑色の軍服をまとったドイツの捕虜達ではないか。

思えば広い世界の中で、両方共に捕われの身となり、シベリヤの一隅で再会するとは、何たる奇縁であろうか。奇遇であろうか。

ソ連の監視は厳しく日独兵の会話は厳禁され、間もなくドイツ兵の姿は消えた。断片的に彼等の話を聞けば、次のようであった。

A)捕われた以上は運命と諦める外はない。運命論的な諦感者であったのがドイツ兵に共通していたこと。

B)ソ連の捕虜に対する取り扱いは、秘密主義で殆んど自由の余地はなかったこと。日本の収容所よりずっと厳しかったこと。

C)従って日本人仲間でスポーツや文化行動をする余地はなかった。しかも共産主義教育を詰め込まれたこと。

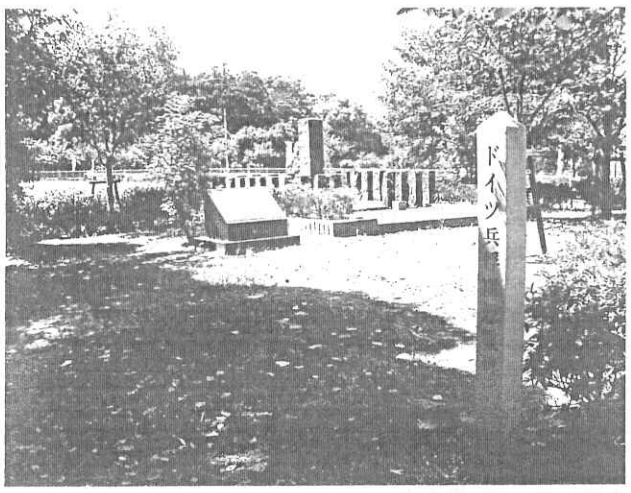
ドイツ兵は、その後どんな人生と運命を開拓したであろうか。

思えば一九四三年(昭和十八年)召集兵として南支那に踏み込んでから、中国大陸を北へ縦走し、満州に入って捕らえられて、シベリヤ大陸を西へウラル山脈の近くまで運ばれた。シベリヤ生活三年半、一九四九年(昭和二十四年)生き長らえて故国の地をようやく踏むことが出来た。

中国も満州もシベリヤも驚くほど広い。その広大無辺の世界で、捕われの身となって旧知の友ドイツ兵と再会するとは。世界は広いようで狭く、奇縁は今も残存するものと考えられる。

ソ連の港ナホトカの岸壁はまだ氷に凍てついていたが、舞鶴港は晴れ上がった秋日であった。港に臨む丘上の紅葉の色がなんと美しかったことか。

国敗れて山河ありの一句がある。紅葉の美観に見とれ、祖国の健在を知り得た時、祖国とともに生きる感動をかみしめた晩秋の午後であった。



久留米市野中町にあるドイツ兵俘虜慰霊碑